

大江以言擬勸学会詩序訳註

はじめに

小稿は、『本朝文粹』巻十「二八〇」に収載される、大江以言「九月十五日於予州楠本道場」擬「勸学会」聴講「法華経」同賦「壽命不可量」詩序の、文章の構造や依拠した文献などを精査することを目的とする。本作品は、大江以言が伊予国楠本の道場で、勸学会に擬えて修した法会の詩序である。撰述の意図、破題など表現の位相、『法華経』など経論の受容、白居易など中国あるいは本朝の先行作品との影響関係については、この訳註を踏まえ、別稿「大江以言擬勸学会詩序考―『法華経』の受容と白居易―」（『東洋の思想と宗教』第二八号 二〇一一・三刊行予定）において詳しく論じる。紙幅の関係で分割したが、本来一体の論考であるので、併せ参照されたい。なお、本文の①から③は私に分段したものであり、傍点その他の記号も適宜附している。

大江以言擬勸学会詩序訳註

吉原 浩人

大江以言の擬勸学会詩序訳註

【本文】

九月十五日於予州楠本道場「擬「勸学会」聴講「法華経」同賦「壽命不可量」

江以言

①

如レ是我聞、九月十五日者、是所謂勸学会也。爰吾党二三子、結縁於彼会、来三至於此間一之者。而作三是念一、法從縁起、水上之月方浮、感触物生、霜中之葉漸落。嗟呼土地雖レ異、時日猶同。処何処而非三道場一、即是三界唯一心、時哉時豈可三空過一、未レ別三東山与三南海一。諸善男子、於レ意云何。於三此処一、修三此会一、豈非下広作三仏事一、遠伝三法華一者上乎。故今境内尋レ寺、寺中逢レ僧。聊延三講経・念仏之筵一、亦含三歌詠・称讃之筆一。善哉善哉、令三

衆悅可^一。

②

爾時如來、重住^二虛空^一、更寄^二弥勒^一、說^二壽命之不^レ可^レ量、示^二涅槃之即非^レ真^一。中夜八十之火、仮唱^二鶴林之煙^一、東方五百之塵、長懸^二鷲峰之月^一。至^下夫釈尊之分^二半座^一、多宝之現^中全身^上、限數難^レ知、羅漢之位猶暗、辺際不^レ測、惟越之地未^レ明者也。

③

既而塔婆如^レ故、雲衆惟新。松房・竹戸、雖^レ恨^レ無^二先達・見修之僧^一、連^レ袖接^レ衿、誰謂^レ交^二農夫・田夫之客^一。如^二以言^一者、累葉失^レ心、白毛加^レ首。三千士之末、折^レ桂之手弥高、二十人之中、服^レ藥之口猶懶。猥以^二短才^一、取^レ要言^レ之、云^レ爾。

【文章構造】

①

発句 如^レ是我聞、
漫句 九月十五日者、是所謂勸学会也。
漫句 爰吾党^二三子^一、
長句 結^二縁於彼会^一、来^二至於此間^一
送句 之者。
傍字 而作^二是念^一、
輕隔句 法從^レ縁起、水上之月方浮、
感触^レ物生、霜中之葉漸落。

傍字 嗟呼

緊句 土地雖^レ異、時日猶同。

密隔句 処何処而非^二道場^一、即是三界唯一心、

時哉時豈可^二空過^一、未^レ別^二東山与^二南海^一。

漫句 諸善男子、於^レ意云何。

壯句 於^二此処^一、修^二此会^一、

傍字 豈非^下

緊句 広作^二仏事^一、遠伝^二法華^一

送句 者^上乎。

傍字 故今

緊句 境内尋^レ寺、寺中逢^レ僧。

長句 聊延^二講經・念仏之筵^一、亦含^二歌詠・称讃之筆^一。

漫句 善哉善哉、令^二衆悅可^一。

②

傍字 爾時如來、
緊句 重住^二虛空^一、更寄^二弥勒^一、
長句 說^二壽命之不^レ可^レ量、示^二涅槃之即非^レ真^一。
密隔句 中夜八十之火、仮唱^二鶴林之煙^一、
東方五百之塵、長懸^二鷲峰之月^一。
傍字 至^下夫
長句 釈尊之分^二半座^一、多宝之現^中全身^上、
輕隔句 限數難^レ知、羅漢之位猶暗、

送句 辺際不_レ測、惟越之地未_レ明者也。

③

傍字 既而

緊句 塔婆如_レ故、雲衆惟新。

雜隔句 松房・竹戸、雖_レ恨無_二先達・見修之僧_一、

連_レ袖接_レ衿、誰謂_レ交_二農夫・田夫之客_一。

傍字 如_二以言_一者、

緊句 累葉失_レ心、白毛加_レ首。

密隔句 三千士之末、折_レ桂之手弥高、

二十人之中、服_レ藥之口猶懶。

漫句 猥以_二短才_一、取_レ要言之、

送句 云_レ爾。

【訓読】

九月十五日予州楠本道場に於て勸学会に擬し法華經を講ずるを聴き同じく「壽命不可量」を賦す

江以言

①

是の如く我れ聞けり、九月十五日は、是れ所謂る勸学会なりと。爰に吾が党の二三子、彼の会に結縁し、此の間に來至せる者なり。而して是の念を作さば、法は縁従り起り、水上の月方に浮ばんとし、

感は物に触れて生じ、霜中の葉漸く落ちなんとす。ああ土地異なると雖も、時日猶ほ同じ。処は何れの処か道場に非ざらん、即ち是れ三界は唯だ一心、時なるかな時は豈に空く過ぐすべけんや、未だ東山と南海とを別たざらん。諸善男子よ、意に於て云何。此の処に於て、此の会を修す、豈に広く仏事を作し、遠く法華を伝ふる者にあらざらんやと。故に今境内に寺を尋ね、寺中に僧に逢ふ。聊か講經・念仏の筵を延べ、亦歌詠・稱讚の筆を含まん。善きかな善きかな、衆をして悦可せしむるなり。

②

爾の時如來は、重ねて虚空に住し、更に弥勒に寄せ、壽命の量るべからざるを説き、涅槃の即ち真にあらざるを示したまふ。中夜八十の火、仮に鶴林の煙に唱へ、東方五百の塵、長く鷲峰の月に懸かりたり。夫の釈尊の半座を分かたれ、多宝の全身を現するに至りては、限数知り難く、羅漢の位猶ほ暗し、辺際測らず、惟越の地未だ明らかならざる者なり。

③

既にして塔婆故の如く、雲衆惟れ新たなり。松房・竹戸、先達・見修の僧無きを恨むと雖も、袖を連ね衿を接するを、誰か農夫・田夫の客に交はると謂はん。以言の如き者は、累葉心を失ひ、白毛首に加へたり。三千士の末、桂を折る手弥よ高く、二十人の中、藥を服する口猶ほ懶し。猥に短才を以て、要を取りて之を言ふと、爾か云ふ。

【現代語訳】

九月十五日予州楠本道場において勧学会になぞらえて法華經の講説を聴き同じく「壽命不可量」の句題で賦します

大江以言

①

このように私は聞いておりました、九月十五日は、これはいわゆる勧学会の行われる日であります。ここに私の仲間うち二三人は、かの法会に結縁し、この伊予国にやってきた者なのです。そのようにして勧学会を行う思いを起こすならば、あらゆる存在は縁によって生じ、水上に映る月はまさに空中に浮かぶように見えておりまし、感興は物に触れてはじめて生じ、霜にあたった紅葉はだんだん落ちようとしているのです。ああ場所は異なるといっても、時も日もなお同じなのです。場所がどのような所であっても道場でないところはありませんか、すなわち三界はただ一つの心から現れ出たものなのですから、また時宜になつたものですよ時はどうして無為に過ごすべきでしょうか、まだ都の東山と南海道の伊予とをわけ隔てられてはいないのです。諸善男子よ、このことをどう思われましょうか。この場所において、この法会を修すのは、どうして広く仏事を起こし、遠く法華を伝える者でないことありましょうかと。そこで今境内に寺を尋ね、寺中に僧に逢っているのです。これからいささか講經・念仏のための法筵を延べひらき、また歌詠・称讃の筆を加えましょう。すばらしいことですすばらしいことです、これ

はここに集う会衆を悦ばせるものなのです。

②

その時如来は、重ねて虚空にとどまり、あらためて弥勒菩薩に伝えて、如来の壽命が量ることができないことをお説きになり、涅槃がすなわち真実でないことをお示しにされました。中夜に釈尊を荼毘にふす火は、仮の方便だと娑羅双樹の間に立つ煙によってお示しになられるものですし、東方諸国の数えることのできないほどの数の塵のような仏の壽命は、とこしなえに靈鷲山の月に懸かっているのです。かの釈尊が半座を分かれたれて、多宝如来が全身を現されるに至っては、仏の壽命の限りも知り難く、阿羅漢の位においてもなお先行きが見えないほどですし、その果ては測ることができず、阿惟越致の位においてもいまだ明らかにすることはできないほどのものなのです。

③

さてそのようにして楠本道場の仏塔はもとの通りに建っておりますが、この法会の聴衆は新しく参加した者たちなのです。そまつな僧房や竹の戸において、叡山のような学識や修行の深い僧がいなくてを恨んだとしても、袖を連ね衿を接する者たちのことを、誰が農夫や田夫の客に交わると申しましょうか。私のごとき者は、代々学者の家の出身であるにもかかわらず本の心を失い、白髪が頭に生えてきております。孔子の弟子三千人の末に連なる私は、対策及第への道はいよいよ遠く、かつての勧学会結衆二十人の中にあっても、

本の心を失っているために『法華經』をとなえる口はなおなまけが
ちです。まげて才能に乏しい私により、要点をかいつまんで述べま
したと、このように申し上げます。

【破題】

爾時如来、

重住^二虚空^一、更寄^二弥勒^一、

說^二壽命之不^レ可^レ量^一、示^二涅槃之即非^一真。

中夜八十之火、仮唱^二鶴林之煙^一、

東方五百之塵、長懸^二鷲峰之月^一。

至^下夫

釈尊之分^二半座^一、多宝之現^中全身^上、

限数難^レ知、羅漢之位^中猶暗^上、

辺際不^レ測、惟越^二之地^一未^レ明

者也。

題目

破題

本文

【註釈】 題

○九月十五日 勸学会は、三月と九月の十五日に行われた。

○予州 伊予国。南海道に属する上国。

○楠本 愛媛県今治市八町西二丁目にある樟本神社付近。擬勧学
会は、ここで行われたと推測される。「伊予国廿四座（中略）越

智郡七座。大三座。小四座（中略）樟[・]本[・]神[・]社^一（『延喜式』卷十、
神名下）。「五日丁巳、授^二美作国從三位中山神正三位、伊予国從
五位下楠[・]本[・]神[・]從五位上^一」（『日本三代実録』貞観十七年四月五日条）。

○道場 修行の場所。寺院。「我始坐^二道場^一、觀^レ樹亦經行、

於^二三七日中^一、思^二惟如^レ是事^一」（『法華經』卷一・方便品「大
正九一九下」）。「令^二人見即心無事^一、每^二一相逢^一是道場」（白居易

『贈僧五首、自遠禪師』、『白氏文集』卷五十七「二八〇六」）。

○擬勧学会 勸学会に擬えて行う法会。

○壽命不可量 壽命は量ることができない。この擬勧学会の句題。

『法華經』分別功德品の偈に拠る。久遠の本仏を明かした、如来

寿命品の後を受け、弥勒菩薩が座から立って合掌して仏に向かい、

このような希有の法はいまだかつて聞いたことがなく、世尊は偉

大なる力を有しておられ、壽命も量ることができないほどで、無

数の弟子たちは歡喜に満ちていると讃えた。「爾[・]時[・]大[・]会[・]、聞[・]三[・]仏[・]

說[・]二[・]壽[・]命[・]劫[・]数[・]長[・]遠[・]如[・]一[・]是[・]、無量無辺阿僧祇衆生、得[・]二[・]大[・]饒[・]益[・]

（中略）爾[・]時[・]彌[・]勒[・]菩[・]薩[・]從[・]座[・]而[・]起[・]、偏[・]袒[・]二[・]右[・]肩[・]一[・]、合[・]掌[・]向[・]レ[・]仏[・]、而[・]

說[・]偈[・]言[・]、仏[・]說[・]二[・]希[・]有[・]法[・]一[・]、昔[・]所[・]未[・]曾[・]聞[・]一[・]、世[・]尊[・]有[・]二[・]大[・]力[・]一[・]、壽[・]命[・]

○江以言 大江以言（九五五〜一〇一〇）。

①

○如是我聞 このように私は聞いた。經の書き出しの定型句。

「如・是・我・聞」。一時仏住王舍城耆闍崛山中、与二大比丘衆万二千人一俱。皆是阿羅漢。諸漏已尽、無二復煩惱一、逮得已利一、尽諸有結一、心得自在」(『法華經』卷一・序品「大正九一一下」)。「阿難、如汝所問。如來滅後結集法藏」。一切經初、安何等語者。阿難、如來滅後結集法藏。一切經初、当下安如是・我・聞。一時仏住某方某処与諸四衆一、而説中是經上」(『大般涅槃經後分』卷上・遺教品「大正二一九〇一下」)。

○所謂 いわゆる。「所謂伊人、在水一方」(『詩經』秦風・小戎)。「及領藩部一、為政寬簡、將吏黎庶、信而愛之。所謂朝廷正臣、郡国良吏」(白居易「張正甫可同州刺史制」、『白氏文集』卷三十二「一五六九」)。

○吾党 仲間。「葉公語孔子一曰、吾党有直躬者一。其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾党之直者、異於是」。父為子隱、子為父隱。直在其中一矣」(『論語』子路)。「互相悦之顧示云、吾党数人、生涯日暮」(菅原文時「暮春藤亜相山庄尚齒會詩」、『本朝文粹』卷九「二四六」)。

○結縁 仏道におもむく縁を結ぶ。「結縁者、力無引導擊動之能、徳非伏物鎮嚴之用」。而過去根淺、覆漏汚雜、三慧不生。現世雖見仏聞法。無四悉檀益。但作未來得度因縁。此名結縁衆」(『法華文句』卷二下「大正三四一二六下」)。「伏希俯提従其所一請二世世結縁」(『隋天台智者大師別伝』「大正五〇一九四中」)。「且共雲泉結縁境一、他生当作此山僧一」(白居易

易「香山寺二絶」、『白氏文集』卷六十四「三一〇三」)。

○来至於此間 この場所にやつて来る。「善哉善哉、釈迦牟尼仏、快説是法華經一。我為聽是經故、而來至此」(『法華經』卷四・見宝塔品「大正九一三三下」)。「其側不遠窅堵波。是阿若憍陳如等、見菩薩捨苦行一。遂不待衛一、来至於此一、而自習定」(『大唐西域記』卷七「大正五一九〇五中」)。

○而作是念 このように考える。「是時長者、而作是念一、諸子如此、益我愁惱」(『法華經』卷二・譬喻品「大正九一四中」)。「是大施主、如是布施滿八十年一已、而作是念一」(『法華經』卷六・隨喜功德品「大正九一四六下」)。

○法從縁起 あらゆる事象は縁によつて生起する。「知諸法從縁起、無縁則不起、法所攝持」(『八十華嚴』卷五十八・離世間品「大正一〇一三〇九中」)。「法從縁起、故復經中説為縁起」(『大乘義章』卷三「大正四四一五三三下」)。

○水上之月 池の水に映じた月。正円の月は仏法の悟りの象徴。「淨淥水上、虛白光中、一觀其相一、万縁皆空、弟子居易、誓心帰依、生生劫劫、長為我師」(白居易「画水月菩薩贊」、『白氏文集』卷二十二「一四四三」)。

○方浮 まさに浮かんでいるように見える。

○感觸物生 感興は物に触れて生ずる。「悲情触物感、沈思鬱纏」(陸機「赴洛道中作二首」、『文選』卷二十六)。「感生於志一、詠形於言」(紀淑望「古今和歌集序」)。

○霜中之葉 初秋の霜にあたった葉。「劍埋_二獄底_一誰深掘、松偃_二霜中_一」尽冷看「白居易「得_二微之到_レ官後書_一」、備知_二通州之事_一」、悵然有_レ感。因成_二四章_一、其四「『白氏文集』卷十五「〇八五七」」。

○漸落 だんだん落ちようとしている。「渭水寒漸落、離離蒲稗苗」(白居易「渭村雨歸」、『白氏文集』卷十「〇四七一」)。

○土地 地方。場所。「山川谿谷土地所生卉木叢林、及諸藥草種類若干名色各異」(『法華經』卷三・藥草喻品「大正九一一九上」)。「嘗聞、神者所_下以司_二土地_一、守_二山川_一、率_二禽獸_一、福_中生人_上也」(白居易「禱_二仇王神_一文」、『白氏文集』卷二十三「二四五四」)。

○雖異 異なるけれども。「長短才雖_レ異、榮枯事略均」(白居易「贈_二江州李十使君員外_一」、十二韻「『白氏文集』卷二十「一二三二」」)。

○時日 時間と日にち。「岐陽旅宦少歡娛、江左羈遊費_二時日_一」(白居易「醉後走_レ筆、酬_二劉五主簿長句之贈_一」、兼簡_二張大・賈二十四先輩昆季_一」、『白氏文集』卷十二「〇五八四」)。

○猶同 なお同じである。「三約_二五味半滿相成_一者、若直論_二五味_一猶_・同_・三南師但得_二方便_一、若直半滿猶_・同_・三北師但得_二其美_一」(『法華玄義』卷十下「大正三三三八〇九上」)。

○何処 いずれのところか。「半酣迷_二所在_一、倚_レ撈方回首、不知_レ此何_・處_・、復是人_・實否_」(白居易「泛_二春池_一」、『白氏文集』卷八

「〇三九一」。「何_・處_・春深好、春深經業家」(白居易「和_二春深_一二十首、又一首(十)」、『白氏文集』卷五十六「二六六二」)。

○三界唯一心 欲界・色界・無色界の三界の事象は、すべて一つの心から現れ出たものであること。「我以_二衆喻_一明_二空義_一、是知_・三_・界_・唯_・一_・心_・、心有_二大力_一世界生、自在能為_二双化主_一」(『大乘本生心地觀經』卷八「大正三・三二八上」)。「三界所有、唯_・一_・心_・。如來於_レ此分別演_二說十二有支_一、皆依_二一_・心_・、如_レ是而立」(『八十華嚴』卷三十七・十地品「大正一〇一一九四上」)。

○時哉 時を得たものだ。「色斯拳矣、翔而後集。曰山梁雌雉、時哉_・時哉_・。子路供_レ之。三嗅而作」(『論語』鄉党)。「曰予生之年兮、時哉_・時哉_・」(白居易「汎_レ渭賦并序」、『白氏文集』卷二十一「二四〇九」)。

○時豈 時はどうしてゝなのだろうか。「時_・豈_・泰而安之哉。計不_レ得_二以已_一也」(班固「東都賦」、『文選』卷一)。

○空過 むなしく過ぐす。「我為_レ汝略說、聞_レ名及見_レ身、心念不_二空過_一、能滅_二諸有苦_一」(『法華經』卷七・觀世音菩薩普門品「大正九一五七下」)。

○未別 いまだわかれたてはいない。「知君未_・別_・陽和意_・、直待_二春深_一始擬_レ遊」(白居易「認_レ春戲呈_二馮少尹・李郎中・陳主簿_一」、『白氏文集』卷五十五「二六〇七」)。

○東山 都の東山。勸学会が行われた。

○南海 南海道。ここでは、南海道に属する伊予国を指す。

○諸善男子 もろもろの善男子たち。「諸善男子、於意云何。是諸世界、可得思惟校計知其數不」(『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四二中」)。

○於意云何 このことをどう思うか。「得大勢、於意云何。爾時常不輕菩薩豈異人乎、則我身是」(『法華經』卷六・常不輕菩薩品「大正九一五一上」)。「夫以狂簡斐然之文、而歸依支提法寶藏者、於意云何」(白居易「香山寺白氏洛中集記」、白氏文集」卷七十「三六〇八」)。前項参照。

○於此処 この場所において。「如來昔於此処、為諸苾芻制戒」(『大唐西域記』卷七「大正五一九一〇中」)。

○修此会 この法会を勤修する。

○豈非 どうしてでないことがあろうか。「後數百歲而寂然繼之、豈非時有待而化有緣耶」(白居易「沃洲山禪院記」、白氏文集」卷五十九「二九二一」)。

○広作仏事 広く仏事を行う。「願諸衆生食我肉者、亦得阿耨多羅三藐三菩提、獲平等智、具諸佛法、広作仏事、乃至入於無余涅槃」(『八十華嚴』卷二十・十行品「大正一〇一〇三上」)。

○遠伝法華 遠く『法華經』を伝える。

○境内 寺の敷地の中。「臨終之時山崩地動、境内道俗咸所見聞」(『統高僧伝』卷十七・智越「大正五〇一五七〇下」)。

○尋寺 寺をたずねる。「覓花來渡口、尋寺到山頭」(白居易

易「中書夜直、夢忠州」、白氏文集」卷十九「一二三三」)。「初尋寺、次逢僧」(慶滋保胤「晚秋過三州藥王寺有感」、本朝文粹」卷十「二八二」)。

○寺中 境内。「海当亭両面、山在三寺中心」(白居易「題東武丘寺六韻」、白氏文集」卷五十四「二四七九」)。

○逢僧 僧にあう。「遇客多言愛山水、逢僧尽道厭羣塵」(白居易「夜題玉泉寺」、白氏文集」卷五十七「二七七七」)。「尋寺」の項参照。

○聊 いささか。「因題絶句、聊以獎之」(白居易「題詩屏風絶句并序」、白氏文集」卷十七「一〇四六」)。

○延講經念仏之筵 『法華經』を講義し念仏を称える筵をひきのべる。「筵」は講説を行う場所に敷くむしろ。「鳳攢題字扇、魚落講經筵」(元稹「獻榮陽公詩五十韻并序」、元氏長慶集」卷十二)。「梁有満法師、講經一百遍、於長沙郡焼身」(『法華文句』卷八下「大正三四一一四下」)。「無量寿仏有八万四千相。一一相中各有八万四千随形好。一一好中復有八万四千光明。一一光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨。其光相好及与化仏、不可具説。但當憶想令心明見。見此事者、即見十方一切諸仏。以見諸仏故名念仏三昧。作是觀者、名觀一切仏身」(『觀無量寿經』「大正二一三四三中」)。

○含 くわえる。「含筆」「含毫」は、筆を加え文章に思いを凝ら

すことをいう。「或操_レ觚以率爾、或含_レ毫而邈然」(陸機「文賦」、
『文選』卷十七)。「相如含_レ筆、而腐_レ毫、揚雄輟_レ翰而驚_レ夢」
〔『文心雕龍』卷六・神思〕。「儒有_二學書臨_レ水、負_レ笈辭_レ山、
含_レ毫既至、握_レ管未_レ還」(白居易「雞距筆賦」、『白氏文集』
卷二十一「一四一八」)。

○歌詠 歌をよむこと。「亦以_二千萬偈_一、歌_レ詠諸如来、如_レ是種
種事、昔所_レ未_二曾有_一」(『法華經』卷五・分別功德品「大正九一
四四下」)。「我愛_二霓裳_一君合_レ知、發_二於歌詠_一形_二於詩_一」(白居
易「霓裳羽衣歌、和_二微之_一」、『白氏文集』卷五十一
「二一〇一」)。

○称讃 ほめたたえること。「仏所_二悦可_一、一切衆生、所_レ応_二称讃_一、
供養礼拝」(『法華經』卷二・譬喻品「大正九一五上」)。

○善哉善哉 すばらしいことだすばらしいことだ。「善哉善哉、善
男子、是真精進、是名_二真法供養如来_一」(『法華經』卷六・藥王
菩薩本事品「大正九一五二中」)。「来至於此間」の項参照。

○令衆悦可 会衆を悦ばせる。「文殊師利、導師何故、眉間白毫、
大光普照。雨_二曼陀羅、曼殊沙華_一、栴檀香風、悦_二可衆心_一」
〔『法華經』卷一・序品「大正九一二下」〕。「称讃」の項参照。

②
○爾時 その時。「爾時世尊告_二摩訶迦葉及諸大弟子_一、善哉善哉、
迦葉。善哉如來真実功德」。誠如_二所言_一」(『法華經』卷三・藥
草喻品「大正九一八九上」)。

○如来 ここでは釈迦如来をさす。

○重住虚空 重ねて虚空にとどまる。「爾時釈迦牟尼仏、見_三所分
身仏悉已來集、各各坐_二於師子之座_一、皆聞_四諸仏与欲_三同開_二宝
塔_一、即從_レ座起、住_二虚空中_一。一切四衆、起立合_レ掌、一心觀_レ
仏」(『法華經』卷四・見宝塔品「大正九一三三中」)。

○更寄弥勒 あらためて弥勒菩薩に伝える。「次正釈、釈中先更
寄_レ此便明_二因縁_一」(『法華文句記』卷一下「大正三四一七〇
中」)。「是時菩薩大衆、弥勒為_レ首、合掌白_レ仏言、世尊、唯願
說_レ之。我等当_レ信_二受仏語_一。如_レ是三白已、復言、唯願說_レ之。
我等当_レ信_二受仏語_一」(『法華經』卷五・如來寿量品「大正九一
四二中」)。「寿命不可量」の項参照。

○示涅槃之即非真 涅槃がすなわち真実ではないことを示す。目
前で現実に説法している釈尊が、実ははるか久遠の過去に成道し
ており、その寿命は無量で永遠の生命を保っている。涅槃は、衆
生教化のための方便にすぎないとする。「汝所住地、近_二於仏慧_一。
当_二觀察壽量_一。所得涅槃、非_二真実_一也。但是如来方便之力、
於_二一仏乘_一、分別說_レ三」(『法華經』卷三・化城喻品「大正九一
二六上」)。「爾時仏告_二大菩薩衆_一、諸善男子、今当_二分明宣_二語
汝等_一。是諸世界、若著_二微塵_一、及不_レ著者、尽以為_レ塵、一塵
一劫。我成仏已來、復過_二於此_一百千萬億那由他阿僧祇劫。自_二從
是來、我常在_二此娑婆世界_一説法教化。亦於_二余処_一百千萬億那由
他阿僧祇国_一導_二利衆生_一。諸善男子、於_二是中間_一、我說_二燃燈仏

等^一、又復言^三其入^二於涅槃^一。如^レ是皆以^二方便^一分別^レ（『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四二中」）。「自^二我得^一レ仏來、所^レ經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇。常說^レ法教^二化、無數億衆生^一、令^レ入^二於仏道^一。爾來無量劫、為^レ度^二衆生^一故、方便現^二涅槃^一、而実不^二滅度^一、常住^レ此說法。我常住^二於此^一、以^二諸神通力^一、令^二顛倒衆生、雖^レ近而不^レ見^一」（『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四三中」）。「東方五百之塵^二服藥^一」の項参照。

○中夜 午後十時から午前二時ごろ。夜間を初夜・中夜・後夜に分ける。仏が涅槃に入る時間帶。「仏授記已、便於^二中夜^一、入^二

無余涅槃^一」（『法華經』卷一・序品「大正九一四中」）。

○八十之火 釈尊の荼毘の火。釈尊が、世寿八十歳で入涅槃したからいう。「或見^下仏寿八十年、或寿百千万億歳、或住^二不可思議劫^一、如^レ是展転倍過^上此^一」（『八十華嚴』卷八十・入法界品「大正一〇一四四三下」）。「涅槃亦云、八十年仏背痛有^レ疾。於^二娑羅^一入^レ滅、那忽譚^レ常弁^レ性」（『法華玄義』卷十上「大正三三八〇二上」）。

○仮唱 方便によつて仮に宣言する。「諸善男子、我本行^二菩薩道^一所^レ成壽命、今猶未^レ尽。復倍^二上數^一。然今非^二実滅度^一、而便唱^二言^一当^レ取^二滅度^一。如來以^二是方便^一教^二化衆生^一」（『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四二下」）。「三乘既弘、双林遺^レ身、仮唱^二泥洹^一、正法常真」（『法苑珠林』卷十七「大正五三一四一一下」）。

○鶴林之煙 娑羅双樹の林で釈尊を荼毘する煙。釈尊入涅槃の折、同一根から生じた一双ずつ八本の沙羅樹のうち、一雙の各一本ずつが枯れて、白鶴のように白くなったから、鶴林という。「爾時拘尸那城娑羅樹林、其林双白猶如^二白鶴^一」（『大般涅槃經』卷一・序品「大正一二一六〇八下」）。「鶴林者、在^二拘尸城阿夷羅跋提河辺^一、樹有^二四双^一、復云^二双樹^一。四方各双故名^レ為^レ双。又云、根分上合故名^レ為^レ双。仏於^二中間^一而般涅槃。涅槃之時其林双白猶如^二白鶴^一、因名^二鶴林^一」（湛然『止観輔行伝弘決』卷一之一「大正四六一一四五上」）。

○東方五百之塵 東方に向かって、五百千万億那由他阿僧祇という膨大な数の国に、一つずつ置いた塵。那由他・阿僧祇とも、極めて大きく数えきれないほど数の単位。仏の壽命が、心の働きで量ることができないほど長いことを示す。「譬如^下五百千万億那由他阿僧祇三千大千世界、仮使有^レ人未^レ為^二微塵^一、過^二於東方五百千万億那由他阿僧祇国^一、乃下^二一塵^一、如^レ是東行、尽^中是微塵^上」（『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四二中」）。「諸善男子」「於意云何」「限數」の項参照。

○長懸 とこしなえに懸かる。「漢魏寔為^二濫觴^一。符姚盛^二其風彩^一。自^レ是名僧間出、賢達連鑣。慧日長懸、法輪恒馭。開鑿之功、始^レ自^二騰・頭^一、弘闡之力、仍資^二三什・安^一」（『起^二永徽六年夏五月詔^一理門論』、終^下顯慶元年春三月、百官謝^レ示^二御製寺碑^一文上、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷八「大正五〇一二六三下」）。

○驚峰之月 靈鷲山の月。驚峰は、靈鷲山の略。耆闍崛山。仏が

常に靈鷲山上で法を説いていることを示す。「所言未竟、無数菩薩坐_二宝蓮華_一、從_レ海踊出。詣_二靈鷲山_一、住_二在虛空_一」(『法華經』卷四・提婆達多品「大正九一三五中」)。「神通力如_レ是、於_二阿僧祇劫_一、常在_二靈鷲山_一、及余諸住处」(『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四三下」)。

○至夫 かのゝに至つては。「至_三夫_一秦用_二商鞅之法_一、東弱_二韓魏_一、立彊_二天下_一、而卒車_二裂之_一」(鄒陽「獄中上書自明」、『文選』卷三十九)。

○釈尊之分半座 釈尊が半座を分かれたる。宝塔中において半座を讓るのは、多宝仏の方である。「爾時多宝仏、於_二宝塔中_一、分_二半座_一、与_二釈迦牟尼仏_一、而作_二是言_一、釈迦牟尼仏、可_レ就_二此座_一。即時釈迦牟尼仏、入_二其塔中_一、坐_二其半座_一、結加趺坐」(『法華經』卷四・見宝塔品「大正九一三三下」)。

○多宝之現全身 多宝仏が全身を現す。宝塔の中で、釈尊と多宝仏が座を分かち着座するのを、二仏並坐という。「於_レ是釈迦牟尼仏、以_二右指_一開_二七宝塔戸_一。出_二大音声_一、如下却_二閔鑰_一開_中大城門_上。即時一切衆会、皆見_下多宝如來、於_二宝塔中_一坐_二師子座_一、全身不_レ散、如_レ入_中禪定_上」(『法華經』卷四・見宝塔品「大正九一三三中」)。

○限数 数の限り。「弥勒菩薩等、俱白_レ仏言、世尊、是諸世界無量無辺非_二算数所_一知。亦非_二心力所_一及。一切声聞・辟支仏、

以_二無漏智_一、不_レ能_二思惟知_二其限数_一。我等住_二阿惟越致地_一、於_二是事中_一、亦所_レ不_レ達」(『法華經』卷五・如來壽量品「大正九一四二中」)。

○難知 知ることが難しい。「仏所_レ得法甚深難_レ解、有_レ所_二言説_一意趣難_レ知、一切声聞・辟支仏所_レ不_レ能_レ及」(『法華經』卷一・方便品「大正九一六中」)。「雖_二善惡難_一知、不_レ過_二九載_一、必自著也」(白居易「策林、三十二、議_二庶官遷次之遲速_一」、『白氏文集』卷四十六「二〇四九」)。

○羅漢之位 阿羅漢の位。阿羅漢は、尊敬されるべき修行者。「穠多雖_レ在_二羅漢之位_一、既在_二付法聖師之類_一。故知即是四依人也」(『止観輔行伝弘決』卷五之四「大正四六三〇二下」)。「如是我聞」の項参照。

○暗 先行きが見通せない。「世尊未_レ出時、十方常暗冥、三惡道増長、阿修羅亦盛」(『法華經』卷三・化城喻品「大正九一二四下」)。

○辺際不測 国土や虚空の果てを測ることはできない。「是諸国土、若算師若算師弟子、能得_二辺際_一知_二其数_一不。不也世尊」(『法華經』卷三・化城喻品「大正九一二二上」)。「是人之功徳、無辺無_レ有_レ窮。如_二十方虚空_一、不_レ可_レ得_二辺際_一」(『法華經』卷六・如來神力品「大正九一五二中」)。

○惟越之地 阿惟越致の位。阿惟越致地。退くことのない不退転の地位。「限数」の項参照。

○未明 いまだ明らかではない。「我為_二大医_一能善拔出、汝於_二仏性_一猶未_二明了_一」(『大般涅槃經』卷十九・光明遍照高貴德王菩薩品之一「大正一二・七三三上」)。

③

○既而 そのようにして。「既而僧反_レ山、衆反_二聚落_一、錢反_二寺府_一。翌日而文就、明年而碑立」(白居易「唐撫州景雲寺故律大德上弘和尚石塔碑銘并序」、『白氏文集』卷二十四「二四六二」)。

○塔婆 仏塔。率塔婆。「梵言_二塔婆_一、或偷婆、此翻_二方墳_一、亦言_二靈廟_一、又言_二支提_一、無_二骨身_一者也」(『法華文句』卷八下「大正三四・一二二下」)。

○如故 以前と同じである。「池中水依_レ旧、城上山如_レ故」(白居易「曲江感_レ秋、又一首」、『白氏文集』卷十一「〇五七三」)。

○雲衆 法会の聴衆。ただし、この意味での用例を諸書に見出すことができない。

○惟新 新しく生まれかわる。万事が改まる。維新。「旧染汚俗、咸与_二惟新_一」(『尚書』胤征)。「文王在_レ上、於昭_二于天_一。周雖_二旧邦_一、其命維_二新_一」(『詩經』文王之什・大雅)。「祚隆_二昌發_一、旧邦惟_二新_一」(潘岳「西征賦」、『文選』卷十)。「内弘_レ道而惟_二新_一、外濟_レ用而可_レ久」(白居易「君子不器賦」、『白氏文集』卷二十一「二四二一」)。「今幸当_二陛下踐祚体元之始_一、施令布和之初_一、則宜_下申_二明旧章_一、条_二学廢事_一、使_中列聖之述作不_レ墜、陛下之聰明惟_二新_上」(白居易「三十六達聰明致理化」、『白氏文集』卷

四十七「二〇五三」)。「移得之後、十有余年、枝葉惟_二新_一、根荄如_レ旧」(菅原道真「春惜桜花応製」、『菅家文章』卷七「五四六」)。「本朝文粹」卷十「二九二」)。「聖跡雖_レ旧、風物惟_二新_一」(慶滋保胤「晚秋過_二三州藥王寺_一有感」、『本朝文粹』卷十「二八二」)。

○松房 周囲に松が植えられている僧房。「新年三五東林夕、星漢迢迢鐘梵遲、花県当_二君行樂夜_一、松房是我坐禪時、忽看_二月滿_一還相憶、始歎_二春來_一自不_レ知、不_レ覺定中微念起、明朝更問_二鴈門師_一」(白居易「正月十五日夜東林寺学_レ禪、偶懷_二藍田楊主簿_一、因呈_二智禪師_一」、『白氏文集』卷十六「〇九八一」)。

○竹戸 竹で編んだ門戸。「竹戸半開鐘未_レ絶、松枝靜霽鶴初還」(趙嘏「早發_二刻中石城寺_一」、『全唐詩』卷五百四十九)。「沙鶴上_レ階立、潭月当_レ戸開」(白居易「仙遊寺独宿」、『白氏文集』卷五「〇一八五」)。「西軒草_レ詔暇、松竹深寂寂、月出清風來、忽似_二山中夕_一」(白居易「禁中寓直、夢遊_二仙遊寺_一」、『白氏文集』卷五「〇二〇四」)。「晚坐_二松簷下_一、宵眠_二竹閣間_一」(白居易「宿_二竹閣_一」、『白氏文集』卷二十「一三四四」)。

○先達 その道の先学。「又彼諸大士是前進_二先達_一、弥勒は後番末学」(『法華文句』卷九上「大正三四・一二六上」)。「先_二達者用以養_レ身、後進者資而取_レ仕_一」(白居易「為人上_二宰相書_一」、『白氏文集』卷二十七「一四八五」)。

○見修 修行に通達している者。一般的に仏教語の見修は、見惑と修惑、すなわち三界の煩惱のことを言うが、ここでは仏道修行

者の意で用いている。「善男子、如是諸人自然怖畏」。衆生如^レ是見^二修慈者^一、自然受^レ樂」（『大般涅槃經』卷十四・梵行品「大正二二・六九九中」）。「但見^下修妙慧^上人、不見^二法華妙慧座席^一」（『法華文句』卷三上「大正三四・三三上」）。

○連袖 袖を連ねる。

○接衿 衿を接する。「連接」は、地域・山・川、あるいは時日が連なり接するという意味で使用する事が多く、袖や衿を連ね接するという意味での用例を、中国・日本の古典において見出すことができない。

○誰謂 誰がと言おうか。「誰謂雀無^レ角、何以穿^二我屋^一」。誰謂女無^二家、何以速^二我獄^一」（『詩經』召南・甘棠）。「誰謂月無^レ情、千里遠相逐」（白居易「客中月」、『白氏文集』卷十二「〇五八七」）。

○農夫 農民。「采^レ荼薪^レ樗、食^二我農夫^一」（『詩經』豳風・七月）。「莫^レ遣^レ擁^レ簾傷思婦、且將盈^レ尺慰^二農夫^一」（元稹「酬^二樂天雪中見寄^一」、『元氏長慶集』卷二十二）。「村隣無^二好客^一、所^レ遇唯農夫」（白居易「歎常生」、『白氏文集』卷十「〇四六四」）。

○田夫 農民。「不^レ如村婦知^二時節^一、解為^二田夫^一秋搗^レ衣」（白居易「寄^レ内」、『白氏文集』卷十四「〇七七七」）。

○累葉 代々。「雖^二帶^レ甲一朝^一、而元功遠致、雖^二累^レ葉百量^一、而富彊相繼」（左思「呉都賦」、『文選』卷五）。「卿一方貴族、累葉雄材」（白居易「与^二新羅王金重熙等^一書」、『白氏文集』卷

三十九「一八七三」）。「右成基者、中納言贈從二位維時卿孫、參議正三位左大弁齊光卿男也。家門久伝^二累葉之儒風^一、父祖共忝^二三代之侍讀^一」（紀齊名「請^下被殊蒙^上天恩、依^二殿上旧勞^一」^中任諸司助闕^上状、『本朝文粹』卷六「一六三」）。

○失心 もとの心を失う。ほんやりする。「今晋侯不^レ量^二齊德之豊否^一、不^レ度^二諸侯之勢^一、积^二其閉修^一、而輕^二於行^レ道^一、失^二其心^一矣。君子失^レ心、鮮^二不^二夭昏^一」（『国語』晋語二）。「是時其父還來^レ歸^レ家。諸子飲^レ毒、或失^二本心^一、或不^レ失^レ者。遙見^二其父^一、皆大歡喜」（『法華經』卷五・如來寿命品「大正九・四三上」）。「服藥」の項参照。

○白毛 白髪。「歎^二命無^二知己^一、梳^レ頭落^二白毛^一」（賈島「送^レ路」、『全唐詩』卷五百七十二）。

○加首 頭に載せる。「古者有^レ冠無^レ幘、其戴也。加^レ首有^レ頰、所幘以^二安物^一」（『後漢書』卷四十・輿服下）。

○三千士 儒者。孔子の弟子が三千人いたことからいう。「孔子以^二詩書礼楽^一教、弟子蓋^二三千焉^一」（『史記』卷四十七・孔子世家）。「孔子曰、敬奉^レ教。自^レ周反^レ魯、道弥尊矣。遠方弟子之進、蓋三千焉」（『孔子家語』觀周）。「圭竇三千士、雲梯七十城、恥非^二齊說客^一、祇似^二魯諸生^一」（杜甫「奉^下送^上郭中丞兼^二太僕卿^一」^中隴右節度使^上三十、『分門集註杜工部詩』卷二十一）。

○折桂 科挙に及第すること。「武帝於^二東堂^一会送、問^レ詵曰、卿自以為^二何如^一。詵対曰、臣挙^二賢良^一对策、為^二天下第一^一、猶^二

桂林之一枝・崑山之片玉」。帝笑」（『晋書』卷五十二・郗詵伝）。

『蒙求』卷上「郗詵一枝」にも引かれる。「折桂名慙郗、收蜚志慕車」（白居易「和春深二十首、又一首（十）」）、『白氏文集』卷五十六「二六六二」。「桂折一枝先許我、楊穿三葉盡驚人」（白居易「喜敏中及第、偶示所懷」）、『白氏文集』卷十九「二二六〇」。「棠棣輝榮並桂枝、芝蘭芬馥和荆葉」（白居易「醉後走筆、酬劉五主簿長句之贈」、兼簡張大・賈二十四先輩昆季」）、『白氏文集』卷十二「〇五八四」。「短才」の項参照。

○弥高 いよいよ高さを増す。「天晃朗以弥高兮、日悠陽而浸微」（潘岳「秋興賦」）、『文選』卷十三。「仰先哲之玄訓兮、雖弥高而弗違」（張衡「思玄賦」）、『文選』卷十五。

○二十人 僧侶・学生の勸学会結衆は、それぞれ二十人であった。「台山禪侶二十口、翰林書生二十人、共作仏事」、曰「勸学会焉」（慶滋保胤「五言暮秋勸学会於禪林寺一聽講法華經同賦三聚沙為仏塔」）、『本朝文粹』卷十「二七七」。

○服藥 藥を服用する。ここでのいう藥は、『法華經』のこと。『法華經』如来寿量品において説かれる、法華七喻の一つ「良医の喩え」に拠る。名医が他国に出かけている間に、大勢の子供たちが誤って毒を飲んでしまった。折りよく帰国した父は藥を調合したが、本心を失った子の中には服用を拒否する者がいた。一計を案じた父は、遺言を伝えて他国に出て、偽りの死亡通知を出した。

子供たちは、本心に立ち返り、藥を服用すると病は癒えたため、父は帰宅して元気な姿を見せた。ここで良藥は『法華經』、良医は釈尊、子供たちは凡夫の衆生にあたる。すなわち仏は、『法華經』を示してもこれに関心を示さない衆生のため、方便により仮の入滅を示して、その教えを知らしめ、あらゆる衆生が煩惱の毒から救済されることを示している。本詩序第二段に「示涅槃之即非真」とあるが、この「良医の喩え」は、涅槃が真実ではなく仮のものであり、実は如来の寿命は量ることが出来ないという、本詩序の詩題と呼応する形で結んでいる。「其諸子中不復失心者、見此良藥色・香俱好」、即便服之、病尽除愈。余失心者、見其父来、雖亦歡喜問訊求索治病、然与其藥而不肯服。所以者何、毒氣深入、失本心。故於此好色・香藥而謂不美（中略）乃知此藥色・味・香美、即取服之、毒病皆愈」（『法華經』卷五・如来寿量品「大正九・四三上」）。「失心」の項参照。

○懶 ものうい。おこたる。「譬如醉人酒在身中、爾時身動心亦隨動」。亦如「身懶・心亦隨懶」。是則名為「心隨於身」（『大般涅槃經』卷二十二・光明遍照高貴德王菩薩品之四「大正一一・七四八上」）。「迎送賓客懶、鞭答黎庶難」（白居易「自詠五首、又一首（三）」）、『白氏文集』卷五十一「二二二」。

○猥以 まげてくをもつて。「尋蒙国恩、除臣洗馬」。猥以微賤、当侍東宮」（李密「陳情表」）、『文選』卷三十七。「臣

猥[・]以^二愚昧之身^一、久忝^二師範之職^一」（大江朝綱「為^二貞信公^一辭^二関白^一第三表」、『本朝文粹』卷四「一〇五」）。

○短才 才能に乏しいもの。「誰会茫茫天地意、短才[・]獲^レ用長才棄^一」（白居易「醉後走^レ筆、酬^二劉五主簿長句之贈^一」、兼簡^二張大[・]賈二十四先輩昆季^一」、「白氏文集」卷十二「〇五八四」）。「折桂」の項参照。

○取要言之 要点をかいつまんで言えば。「舍利弗、取[・]要[・]言[・]之[・]、無量無辺未曾有法、仏悉成就^一」（『法華經』卷一・方便品「大正九一五下」）。

○云爾 このように申します。文章の結びのことば。「視^二其粗成韻章^一、命為^二池上篇^一、云[・]爾[・]」（白居易「池上篇并序」、「白氏文集」卷六十「二九二八」）。

「使用テキスト」主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点・読み等を私に改めた。

『法華經』『華嚴經（八十華嚴）』『大乘本生心地觀經』『觀無量壽經』『大般涅槃經（南本）』『大般涅槃經後分』『法華玄義』『法華文句』『法華文句記』『止観輔行伝弘決』『大乘義章』『続高僧伝』『隋天台智者大師別伝』『大唐西域記』『法苑珠林』『大正新修大藏經』『史記』『晋書』『全唐詩』『中華書局版』『文選』『孔子家語』『新釈漢文大系』『論語』『文心雕龍』『白氏文集』『新釈漢文大系・白氏文集歌詩索引』『分門集註杜工部詩』『四部叢刊』。

『本朝文粹』『新日本古典文学大系』『延喜式』『日本三代実録』
『新訂増補国史大系』

〔附記〕小稿は、二〇一〇年九月三日、台湾大学文学院演講庁において開催された、和漢比較文学会第三回特別研究発表会（特別例会）において、「大江以言擬勸学会詩序と白居易」と題して発表したものの一部を、訳註として成稿したものである。